朝顔日記

お菊

五

特別
へ13
4268
5

高砂 玉光堂

# 朝顔日記卷之三　故芝叟遺話

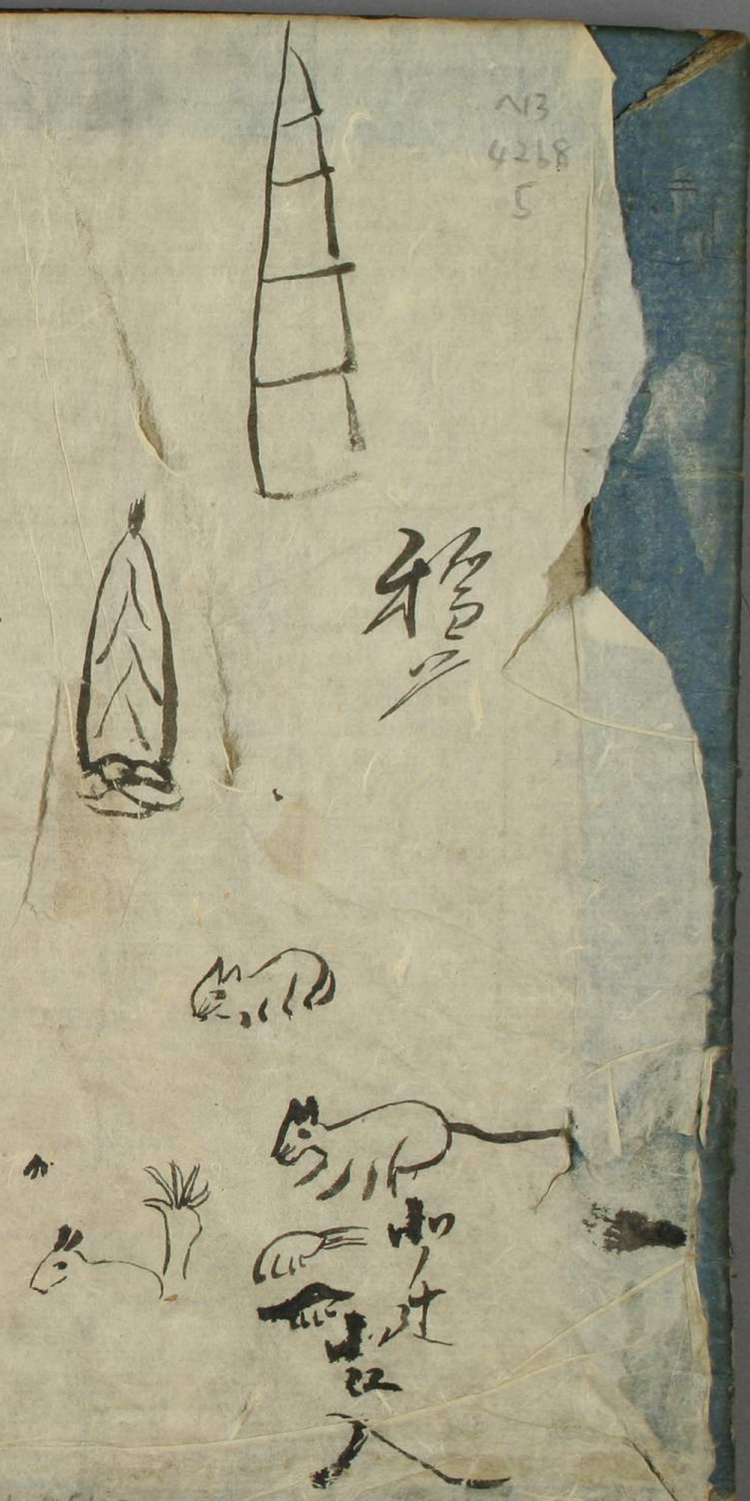
柳浪 著

## 七回目

今茲秋月弓之助が娘の深雪、青春破瓜よもふ[illegible]父弓之助佳婚ともとめて。さを小妻あいせんと。渾家の水青もろとも多方心を費やし。詩歌茶香の友どちふさへたのみて。才貌双全人とぞたづねける。弓之助が和歌の伴ふ加茂祐包といふ人あり。忽日園崎村より来り。弓之助よあひていへらく。かねゞ足下の望まゝにたる才子こそあんなれ。と東福寺の月心和尚。さいつゝろ浪士。宮城阿蘇二郎といふ人よ。嵐山より邂逅しさと試かさり。舟うけてたま



N13 4268 5



91-2560

の〻音よあそ〻ふらむ。あら〻しのやはの花の木ぬれ。とよをたるまと。またそのゆふべの句詩よ渡月橋頭人渡月。月明還在緑波間とつくをま。その氣宇の軒昂ハさらふもいとず。才器ハ古今獨歩ぬまと申さまき。下官ハいまざその人ぬ見ざまども。ふらるゝでくうらぬき月心師の語ふ。いつもまハあろべうらず。心師ハ緇徒のさとぬま。誰そべちふまうるべき。氷人ぬたのをて。媒話て見たまふべ〻と叙らをける。弓之助ハもとよま。祐包の篤厚をよく知ま居をば。つねふをの憩言とれたもハず。ふうくその語ぬハ信じ。そハよくもまつ〻せたまへま。さもあらバまを蔓をもとめて。かたらひ見侍らんとあつくその好意ぬ謝し。種々歎待てぞ回〻ける。さまどもの弓之助ハ。生まつきたる慳容よて東福寺の月心とハ志た〻しを友垣ぬるゝ。夏中ハ山籠ま〻て。戸出せらをずときく。ときく〻たづねゐて。和尚の學窓よ偶坐〻て。半日の閑談をふし。そのほいでよ阿蘓次郎ぐ人品をぞたづねける。月心いへらく。かの宮城氏ハ今の世の英雄よて。まことふ王佐の才ある人ふま。詩歌の類ハその緒餘よて。コ一よ志のころさをえ〻かの人のうたよ。

うををとのふぬをのうへよもをしかをりある夕の心ためさんと詠めま。をの歌のをろハをを翫味見たまへ。大丈夫の氣象よあらぞや。弓之助まをその品表を問よ。瑕ふ瑕壁

と知らしめせといふよぞ。弓之助大よろこび。志ぢ〳〵まゝと四
表八表うちかたらひてかへりぬ。かくて弓之助次の日も
渾家水青等とさいのことなかたり出し。宮城氏よ親き
人もがふ。氷人よ央てんとつぶやく。日比さの家よまゝろや
をく入来る醫者よ。橘雞菴といふものあり。とりふ〳〵その
坐よ居あいせ。ふまををく〳〵て酒酸鼻なれざめらし。そい僥
倖ふろさとこそあま。その宮城氏ハ不佞とい仔細有て
日比親しき中らひなりとと。そまよ。馴染る由をもあらま
しけげ。不佞良媒なふ。たやをく事が成おはせ申
さんと。ふたり負して阿蘓次郎が才と。標致とを口ふま
まらせて。褒るふとしとふ〳〵ぐ〳〵。説得て天花も乱墜
るばらりを。弓之助が性として。かくうたたる調子ふ
のらさまバ。いづまハ足下の紹介を蒙りてん。さり
ねがら一應その人品なたらし見たるうへのあとふあ
そとて、最愛の一個愛玉ねまべかく大事ふかけて念
ないるくも道理なり。かくて日なが經しが。弓之助ハ今日
も省よ来る鶏菴をとどらて、てや八月も二日三日立ぬ。
来る望の日ハ、ちう宿よて賞月遊を催し。縉紳家両
三位なが請じ奉り、例の祐包月心ふどとも招き待う
なり。幸のをりふまバ、御話の阿蘓次郎とやらんとも一
坐せしらて、その人品ともも見まかしけまバ。貴老多勞ね
がら。宮城氏へ来ん望の月の遊ふハかふらず。光貴たま

へとゝぶ語を傳ふほどよく いしらへたまいきと宿題
なさへおとぎけてたいしける。雞菴いさきと允容やがて
岡崎なこち出ぬ。鷄菴もと秋月が内福なよくさとうみる
ゆへ。事成バ一廉の媒表なきてやらんと、そぐろふ例の
火なる動らし。しや手ふ取たるものくやうふ。ふどく楊
楊とちて下河原よいたる。宮城阿蘓次郎よあひふさく
笑貝ばくる。きらくの由をつげ。来る十五日ふい。秋月氏
の高會よ往せたまへと約なるしける。さてまた岡崎
ゆるむをめの深雪ハ。宇治よて眷戀し情郎ない。筑ハが
その名なる書ばけくきしゆへ。宮城阿蘓次郎とつふことを
志きる。今ハもその人なる婚よせんとの私意よて。多君

月見の支度せらるゝなる見て。よろおぶとゝかざるなし。媽の
水青ハ。乳媼の真柴。了裏の浅香とも。顔見合てうちとら
へる。さきども水青い。物がさた良人なるおそき。前よ阿蘓
次郎と。螢狩よていでわひさるおとゝびふらくかくし。侍女
どもふも口どめせしゆへ。たゞおき私下よて。さやたあひ。
ミないそくといさきたち。何とぬくいさましけふぞ見え
ふける。かくてその日ふかるけきバ。女児深雪ハ。朝よだき
よ起いで。紅粉よ蘂脂よと。いと靚よ粧ひらざる。搔頭
いいつきふせん。玉簪そいよよろしかるまじきやふど。うち
躊躇ばく鏡臺よ向へい。真柴い小姐の背なほどく少
うちたくきて。あやかるものふてべるふどく。ざきおといへば。

浅香もまた。おうらやましくさうらへおどそくのかして。闔門ぞくりさ居たまけまた。日も糾ま頃ふくさろ。橘雞菴真青ふふまこてかけ来まる。喘吁くごいひけるいさてく遺憾おまる。かの阿蘓次郎ぬし。俄病づきて得まゐまがさし。よろしくさとまとまくまよと申さまぬ。今朝顧くときハ。感冒も背かと治くゆへ。ぞいぶん伴ふひ往てんとて。月代を包み居らまくが。後ま誘まゆきく時ハ。いかふも大熟さく出て。頭痛勞やうふまとて。高枕ゆかくして。うち呻吟居られき。脈ゆ診ひさうらうふ。一かさふらぬ再感の邪勢ふまバ。桑まぬも無理ふらず。さまど阿蘓次郎ぬし。重き枕をあげて。おの体ふまバとてもえまゐらず。さまふがら。御兼題い詠れまてべる。今宵の東人へぞけくまよ。ようさまくく。懐裏さがくてとま出く。弓之助へ逓くける。弓之助ふまゆくりけとまふまぞくあさまて語ふく。渾家小姐ふ。おどく望ゆうくふひ。暮の花ゆ風ふとらま。さやけき月の黒雲ふ掩まくちて。天さへふぞくかさくもまい。うちふめまてぞ見得ける。弓之助阿蘓次郎ぞ。兼題のうまを讀バ。うつくき手くて。

山のとれ今宵とかまふくもがふ入うまふくまとまを月のかけ春雄と名ゆふるせまを。ふまをれんその日の秀逸とまさこへける。明まバ雞庵まと入来まて。前宵のふと和ど問ける。引之助ハ雞庵ま對ひて。もふべの會まハ賓客たちも宮城

氏と一坐せざるが。遺憾ふまと申さまき。おハ霄の賓客の詠草ふまと。已夫婦がよを歌をも交へて雞庵よ遁し。つゐてもあらバおもと紙宮城氏へ見せてたまハまとたのミぬ。おのひまふ深雪ハ。ものがふもひとのべたる一首の戀歌を短冊よおたゝめ。雞菴がたち回る袖紙ひをとゞめ。おもふものおましと。かの懐紙の中ふ巻おめてとさせバ。雞菴ハ何の氣もなうど。そのまゝ懐抱よとしいま。慌忙下河原よいたま。阿蘓次郎が容体紙診て。弓之助が口詞をも法たへ。件の懐紙をさしおきて回まける。あとふて阿蘓次郎ハ。懐紙どもくまうへしし覧中ふ一枚の短冊。とさまれあふ紙とまあげ見まが。

おうまとい末のうさ紙いうふせんふもうけ亟たつ宇治の川霧とかひたる墨痕いとをもけし。阿蘓次郎ハくしとうちまもま。おの歌ぬしの名深雪とおるせま。日外宇治よてあひしも深雪おるよ。おの歌のおろもうぶうしこひとまおちて。思案のかうべをいたぶけぬ。

七回　假

そのゝち荻野祐仙ハ。醫學修行せんとゝくゝ洛陽ふのぼま。三本木よて川つさの院落と借。おのごろ抽法をてあり けるよ。橘雞庵ともはしおくいでであひるが。雞菴ハ當年の背約紙とびぬ。祐仙もとよま蠢愚しさものふまバ。早く雞庵が侫辨よたらさき。まと懇よ結交ける。一日雞菴

宇金鑑
布袋を分布袋を
分高抱布袋侍
堂あ分分石徳今
偽逃一ケ七ゑさ
作園田園
歌枕画
医狩野
仙三本木
の儀合
て橋作菊
はうり假暦
と紅葉利月
いざるかいく
とよしたのむ

祐仙が三本木の旅亭まきたる話けるハ昨日ハいと遺憾
ふしとそおもつゝ、惜むべし。一薫の祝酒成契ゝこゝふひれと
呼やく、祐仙いぶらしくれもひ。そい何等のふしとおもふ
問けるに。雞庵いへらく。とが友宮城阿蘓次郎成。秋月弓
之助といふ人。一個女児の婚とせんとて。まづその人品成
見まくおもひ。月見の會成催し。不佞よ紹介さしめて招
かるしが。已よその日おもふて。阿蘓次郎病ゝきて往ざる
由へそのこと遂よ水よなるふき。噫かの阿蘓次郎。福分薄
らして。絶世の美人成占得ざるしと。只管嘆息して止
ざるける。祐仙いへらく。そもハ岡崎の秋月氏よて。その美
女の名ハ。深雪といふふとも。までとも志ま。雞庵ゝどゝ

あやしゝいふふも志ふ和ふ。貴邊ハいふふして。よく精しく
志ふたまへる。祐仙ゝくゝそ志ていへらく。小生さいつぶろ清
水よまうでし時。舞臺よて由きちがひよ。その人を見たる
が。今の世の薄雪ともいふべく。とざきはどうつくしかふ和。
そのとき小生。かの姐がたとやきたる標致を見て。肌肉酥
麻て醉るがおとく。そもとう夜として。夢想せざるハな。
その日おとつけて見得かくもよ暴ひもき。かの人のをもろ
岡崎の莊院とも認け。且隣の老婆よ問てその苗字をも
志つゝぬ。ほねゝ清水の圓通菩薩よ願籠して火食禁せ
し奇特よや今日滿ぞる日ふあたふ。足下よふまの
手蔓を聞いだせしハ。まさしく赤繩のあるふるしれこ。

いうよ雞庵子。その秋月氏へ小姓成螟蛉よ媒ね。雞庵をて
笑成恐てれをゝやう。那の阿蕪次郎と祐仙とをくらぶれ
バ。まおとふおを。雪と墨れるちがひよて。祐仙ハ極て醜き
漢子れる。さまども雞庵往年。おの祐仙よ了金子借り
と了し。債あるゆへ。ををしうちにけよ和君ハ不男ふ了。
おの縁談をゝまゝべらどといいとをず。れるかどをらひ
見るべし。さ了れがら那方よハ。いまゞその人ハ見らをねど。
阿蕪次郎が高名成暴ひて。婿よせんとの准備ふをバ。おの
と了ハ。他人のおと成いひ出しても。とても承引ゝされま。
祐仙いへらく。さもあらべし小生成阿蕪次郎ふふして。をを
かをよと。のつぴきれらず。せちがひけるふぞ。雞庵もかどゝ

窘迫。さハのたまへども。阿蕪次郎ハ月代頭れ了。和君ハ
慈茹のおとを髻のさま。いうでたやをく假おはをべ成。祐
仙いへらく。れよされど前髪剃こよかたらんといひ
ぢ、肱ぢうふる調度よ了。圓金三十両と了出し。まづ
まをい當坐の賞摽ふ了事成るバ分外の辛苦餞を
さいらをべしと雞庵ゝ前よさゝおけバ。をとおの雞庵
黄白成慾がるおと。青蠅の血をひさがろがおとくれれバ。
あをい野とれを山とふを先ハ鵜護の鬼れ了と直よ金
子をうけおさゆ。和君されもひたまゞ。施をべき手段し
あ了れんと。間よ合といひて。その日ハをうを田了ける。
明日雞庵まを。三本木の借儀舎よ訪来了けをい。佑

仙ハ頭巾手拭よてまた。浴衣かぐらふ出迎て。笑顔つくを。雞庵ハ是を着て。ともふうちとらひ。和君もまと感冒たまひしら。頃の風神いとふかく。風流雄なる崇るとよと戯むをけまば。祐仙手むやく手拭なとまバ。いつの間よりハ。元服天突よ被て居て。蟆るふけ鬢せしおと くれまば。雞庵ハあまとのおとと興をとまし。ばし呆面へて笑さへせず。祐仙ハいとほまてうふ。ふとよく似合たらん。もやく秋月氏へ注をもきれと。只顧たのをけるもへ。雞庵ハとてものおとふ。今十四五両も騙収さんと。計較居たまバ。祐仙ぶ志うく月代まで志て。志さてせもたるかへ。一日くといひのせし。幾十の日數ハ過けるぶ。一日

祐仙清早よて出うけて。雞庵ハひつたて。今日ハぜひとも。秋月氏よ引見さまよと。さびしく催促けるふぞ雞庵を今ハ逃るく語ふく。志ぶ〳〵穿換して。祐仙とうちけをだち。一条戻橋の宿ハ。さらバまづ東山を逍遥しこそと。伴ふひもさて。四条の板橋うちをたて。芝居側とあとふ見ふし。祇園林ハ徐々と徬徨あてくふ。瞥對面ハ見まバ五旬ぐらての武人一個の小厮よ草鞋架せて。南のかさよて出来まバ。雞庵因果と口辺て。祐仙よむうひ。おまこそい。秋月弓之助殿よとうよ。出合頭よ雞庵ハのあいだいいうよ見かぎてたまひ〻。堰鼠のうちやさけん。絶て御尋もあらずといへバ。雞庵もおまよ應じかれ

さを丁寧ゑ寒温成ぶしつ。引之助かさねて、かの宮城氏今
ゑどい。御病氣も全快ゑ。けるゑ。這方ハ何時ゑてもくる
しからず。かゑらず御同伴ゑて。御入来ゑをといひけゑ。祐
仙ハ適間ゑ。さをゑふ雞庵が袖ゑひきて。宮城阿蘇次
郎さをゑい。雞菴子をやく。秋月大人へ引見らをゑと。ほぶ
やく。雞菴も今さらゑゑとせんをべゑく。僥倖ゑをゑ宮城
氏病氣全快ゑて。同道いたしたゑ。やゑ阿蘇次郎どの。
をやく秋月大人へ名對面ゑをと。引之助へひさゑハす
をバ。祐仙ハ武人の身ぶゑゑ成せんと。ゑをゑふゑをゑ。
衣紋成正し。小生ハ宮城阿蘇次郎と申ものゑ以来
御懇意成かゝむゑゑん。日外の御會しのをゑい。あや

ふくゑ所勞侍ゑて。得參上いさず。約成をひき失礼を
申。殘念ゑおくふいゑ。さをゑが大内の御七の子ゑて藩士
のつをゑいゑ。武士の口状成おぼえ居ゑ。後いをゑずま
づハ假粧をゑしつ。引之助ゑ成見るゑゑ大ゑゑおどろた。
やゑをゑし呆をゑしが。世ゑハまさかくまで。揃ゑそろひし
醜漢ゑおるものゑゑと。をゑや肚裏ゑ八九分の不平を生。
おぼえゑ冷笑て。ほやゑし語成さへ交へゑ。祐仙ハをゑを
ましゑたゑと。をゑたゑ顔ゑして雞庵ゑ對ひ。かねて懇望せし
秋月氏ゑはゑらず御意を得。ゑふゑどろ悦ゑしくい。
途中ゑていゑるゑと清話もゑしがゑし。那方茶店ゑて
一献さもをめてん。誘たまへと強ゑ招ゑけをバ引之助

いと不興氣なるまゝ。懶一懶より中村屋が店よりあがりて葭簀かくまこと。三個うち円居て。說話らふ。雞庵ハひとりて心ゑ苦きゆ。いまや祐仙が馬脚を露ハすうと。手より一把の汗と握て。いつゝ。頰あゝく耳ゑて。ゑどゝ針の筵より坐をるごく。活たる心地もおゝてをけて。やがて當壚ども。種々酒肴ゑ拿来て排をく。祐仙ハ上をたての青書生ゑるまゝ十分得意の顔色よて。ひたをら東人ぶををにくて。弓之助へ盃せていたらくゝゑハゞ武忽より且野趣ふるまと。ゆゝをうをゑく手酌をるとて。涸たる銚子かたむくる。袖口より匂ひ袋のよろびいでたるぞたゝし。祐仙ハ何がふ弓之助への歓待より。日比おのゞ同士の醜態ゑあらハし。田樂ゑ串ゑがら。犬ふ喰をとて。王といへといひけく。犬よあたへゑとして。あやまてて膝より墜せしゑハゞ拾とて喰ふど。沙汰のかぎをふぞ見えける。弓之助ハまをちの挙動ゑ見て。まをゝ謗をわらひ。這奴ハ世よふ名盗人の類ゑらん。本領ゑ試して困せくゝと人と。即坐より七言絶句ゑ作て。會面の情ゑのべ和韻ゑ賜ハるべしと乞ひけまバ。祐仙もきの及第よハひしと窘迫て。もやく韻字ゑ次でく。達者ゑるところと賣弄さんと。焦燥ハせくほど趣向うゝまをのつそつ悶搔といへども。生得たる鈍漢。ゑのしゑたくゝ。志ををふ親ゑうちむきのうちゝ何ごとぞゑをべ。おのをゞ親ゑ。才智ゑ澤より産ゑけざを腹立おを。ひたをら小頭ゑかたむけて。くるゝむきゝや半時

ばうをふして。からうゝて作をあげ懐なる半紙より蝸牛の這たる痕のごとく。滅多書して。おの〳〵さゝいたせば弓之助とをあげて。おの詩を看よ僅ゝよ。平仄のあ〳〵たるまでふて。机ごゝをせぬ未熟さ。唐詩礎明詩礎たのそ和ゝ。涙垂児の作よもおとをを。そのうへ墨蹟の拙さ。宛も鉛をを以蒔たるやうゝ。弓之助たちまち氣色を損し。遽よ持病の疝氣の起をと。謝語さへそこ〳〵ふして。その坐を蹶たて。佛頂面してとゝを去。岡崎の宅より歸を。氣憤々的書齋小しをを。渾家の水青ハ女児をろゝも出むゝへて。良人が氣色のたゞ和らぬをとづゝよ。弓之助ハ眼血ゞし。いきまきけゝ。やよ水青ハねゝ卵とも噂せし。阿蘇次郎ゝよ。今日はじめて出あひたを。水青ハよろゝおびて。そをハまづ幸のおとふとべを。さゞらし美丈夫よてあををらん。弓之助うちとらゞち。和よばゝかるおとを。丹波猿こゝひとし紀下藹。這奴虚名を責弄を。身の活計以せんと巧ひ。まけ〜からぬ大騙屑を。雞庵めも雞庵め。とをよ一盃食せたを。その證據ハふれ以見よ。おの詩の作をざまハとさん〳〵ふ罵おを。いゝふおても心を得ぬハ。祐包月心のともがらを和を。あの衆よかぎををぐろ和るおとへ。申さをぬをづ和るよ。かの大騙屑ゝぶ人のおらぬ。名歌妙詩を盗たくいへ。已ゞもの顔よ誇りしゝへ。さゞらの鼠もうまく欺員しゝ。苦くおさいとを和を。

とはひよわきぼらとちふきバ。水青ハ不ど〳〵合点ゆうず。
その詩ハとをあげ見きバ。詩の意ハいざしらず。その字の
かたちいとさとなげかるるぞ。良人の憤をハ理ふきども。真
の阿蘋次郎が書のさまとい。鷺と鴉のたがひねをまいハ
必定いうふる奸者ゥ。阿蘋次郎よ假粧て。良夫を欺きとと
推量せしらど。あうしていとをぬ時直ねるよ。女児深雪も肌
身をねさぬ朝顔の扇ハ。爹弓之助よ見せきくれもへど。宇
治よてあひしい。私下ぎとねきバ。ひとをたぐ伎癢よたへし。
毋尸自と顔見合。頓口無言うちちほをつ。詰且雞庵園崎、
省よ来きバ。弓之助家眷よ吟咐て。内房へとをとず。己は
病と稱して遇どきバ。雞庵をご〳〵立んとをるを水青ハや
とらひきとゞめ。足下いとことえぬ人うねいうよ家公を
欺負して。假東西ハ偽賣らきし。無状ちうさねをと。
膝ハ叩きてねだをける。ちの時弓衆どもハ右左よを
雞庵をとらへ。耳ハひくうら。凡うちたくうふさいふむよを。
さしもよ鉄皮ふる雞庵もゞど〳〵面目ハ失ひ。その
坐よたまをかねて。命からく逃うへをぬ。さてをう家へ
囲を見きバ。祐仙待ぶせ居て片時も早く。岡崎へはれ
ゆけと。催促たつきバ。雞庵ハ進退きくふ谷まをとも。
その色をも見せず。ねろほど秋月氏へハよく〳〵いひよ
をおきたきバ。何時よても訪ゆきたまへと。一寸逃どいへバ。
祐仙ハきをハよきと心得。いそぎ岡崎へ往て。秋月ゥ

城阿蘓
次郎田の今
樣の際小こ
せうきて對
面をなす

玄關よ案内す。弓之助きくよりそく神たて
いやがて西守城をうひてふひゝへしつ。祐仙ついぐさび往
ても。志うあをけるゆへ。さだかをの揖呆ふきとも。やう
やくまをとさとを。血眼よ和をて雞菴ゝ許よ来を。百
般ねををぶとを吐て。雞菴がはじめ取逃せし二十両ふ
今度の賞探しを併こ五十両。たゞ今返せとの、志を。
腕をまくをあげて。雞菴よむさぶをたき。組こつ轉んつ
雞菴ゝ。志たくゝふ打擲せらをおゝらゝやうゝふ賺し
てさあらばまづ賞據の三十両たけゝあづけ先より取
囲し。明日返濟まあらすゝ。しるんおゝ欺負すはし。
その夜よ家伙さて責よりてもきゝゝ志らず。逐電

世を。憐むべし。荻野祐仙。うまをたきたる。愚蟲とゝ
いひおゝゝら。たく一場の色慾のためよ。己ゝ拘口をとを
まへど。一塊の天鵝肉ゝ喫せんとして。志うく奸者
の罠よかくを。前後五十両の金子ゝ失かひ。その業ゝら
ぬ。治郎頭よ剃まぶてを。志のをと已よかくをおく。世
の胡慮とそるをふける。かゝて下河原おる。真の宮城
阿蘓次郎ハ。その所勞全たく爽やぎけをバ。さいつおゝ
秋月弓之助ゝ月見の會よまねきたる。その好意ゝ謝
せんと。袴外套かど立洲よ打扮。今日岡崎村をたづね
秋月ゝ玄關よを。物まうをて。宮城阿蘓次郎よてをべを。
秋月大人御宿よまいさバ。御對面ゝおゝひ侍るとへひ入

ける。了衆浅香ハ。その声を洩聞。物の間より闕窺て。慌ふためきはしりを入て。奶々姐々ふもとげきらせ。闔門いそ〳〵としてよろこびける。弓之助ハ声をげましし。執次を叱りて。例の仁ゑうこせたり。留守とへど。高やゝふ呼びつ。阿蘓次郎とやく聞とり。そのまゝ口、扶を云捨。一礼のへてぞたち出ける。程へて。阿蘓次郎が下河原の僑居より。肥後より脚力来り。事あるふよりし。その書状着次第。その物のめしたき。即日下来るべしといい越しけるゆゑ。阿蘓次郎慌てく僑居をかたぢけ。帰心矢のごとく。夜を日にはいでくだりける。その縁故ハ。阿蘓次郎が父廉助早く死し。獨の老母。九死一生の病を臥。露命且夕に迫り

かバ。一門の人々を集めけるゆ。あたりも和田三浦の支属のごとく。幼少の児女までを義きべ。九十人に餘きる骨肉ゆ。世にあるうちふとて、そをく〳〵ゆ記念分して後。老母ハ一坐を見ゆゞし、やがて末期の盃を酌かハしつ。このあいだきばし坐もきづまりて。何とゆくうちゆめもぬ此時児もちの娘ども。病床に居よりて、母御前今ハの際までで。いさゝかの逆事ゆく。一個の孫子ともさきだてたまハず。十分の榮耀果報いとぐき御臨終ゆをバ。その世ふおもひのこりへ。おらせたまハしと。祝なくさめけ〳〵バ。老母おもき挽をあげて。今しもそるとたちの。申さるゝと聞バ。とゞ臨終果報十分ゆ。とゝ。されもいろ〳〵ゆらべ。さて

一個の遺憾ありあり。乙の子阿蘓松ハ一度御國ゟ出
ましよりて。今よりその安否ゟ知らず。互に御上を恐れし
由なり。雁のたよりもたえてたて。哀人とちがひ。ゟ
婦の愚痴未練いまゝの人ゝよりて。零落なきし阿蘓松ゟ。たゞ一目見て死ふ
たしとおぼえぞ声ゟ出て雨くと泣けまべ。そハ道
理よりよりも。坐よあるかぎりて一同ゟ悲嘆の涙ざよ
くきよけ。人々ゟの動静ゟ見よ志のびど。百般商議
せしうへ。よき傳を央。御側室雲居の御方へたよりて。
ふゝく愁訴よりよびけまべ。雲居の方きゝしもに
あはれとおぼさきて。ゟのゟとひそうよ。殿へうかがひたま

ひけるゟ。菊池殿仰すよい。渠がゟとハ自盡代の追放
ゟ。めしかへすよりとハかゟハぬぞよ。とりゟ知らゟまで
ゟも罪ありて。他國せしものども晝間ハ憚りゟぬれども。
夜ハそうゟ潛ひ来よし。無状ゟる奴ども家老
どもゟまうしたけ。きつと査問よりかゝもづゟきど
も。ゟよそ國ゟ治るよしとハ。重箱とびきらを用ず。
摺木よりて滌ふゞゟとくす。隅々ハゟきとゞゟぬゞよろ
ゟきものぞと。ゟりけるゟぞ雲居の方よりとやくゟ
の内意をきゝせたまふ。一門のものども大ひよりよろこび。
さてこそかく急飛脚ゟたて。俄よ阿蘓次郎を呼
下したるものゟりとて。宮城阿蘓次郎ハ取ものを

とゝあへど都城たちしゝゞ。程ゐく故郷肥後の國よ下
ゝつき。夜よまぎきて。紅鶴林の荘院よいたゝ。旅装
のまゝふて。母の病床よりうちことをきゝ。親族並居たゝ。阿
蘓次郎。母の枕側よちゝびき。阿蘓松よてい。街氣色
いいゝふあらせたまゝとのゝゞ。母ハ聞よゝ。ゝハ阿蘓松う
ゐつゝゝやと。待ゐがきたるとゞ児の顔。一目見るよゝ
莞爾ととらひて。眠るゞおとを往生せゝ。ゝの時人々の
哀傷いゝゞゝきけきゞゝきるさず。中ふも阿蘓次郎ハ。紅
涙堰あへど。声ゐ放ちて痛悲く。喪のうちハ。れくふゝき
家廟の側よとぢゐもゝゝ。七々の逮夜ゐたとゝ。香花を
供ゞて。百日の間。在をゝおとく仕へあげ。さてしも餘波い

たきせねど。御構の身ゐかゝ。まと故のおとく。國と
たちのき。南の関ゐ出きバ。とある山家あゝ。いのゝたゝい
筑後の地方かゝといゝ。そゝよ些の好のをのゝたよゝて。
里人の児どもゐあつゝ。手習の指南ゐ活業とし。母の霊
牌を設けてゝきゐ祀ゝ。這里よゝ且暮東のゝゝ紅鶴林
ゐ望く。廻ゝふ双尊の墳を拜くぬ。とゝく志て一年の喪を
ゝとゝゝおゝゝぬきバ。ちゝきふまゝ都へのぼるべしゝとその支
度をゞゐしたゝけふ。

八田月

かくて。宮城阿蘓次郎春雄ハ。筑後界の南の関の外の方
ゐる。春の町を起程。日ゐかゝねて。長門の赤馬ゞ関ふい

たゞ。阿弥陀寺船を借て。順風に驅てゆけど。かどをゝく
播磨灘明石の浦よそにさふ〻る。まのゆふべ。後背の山
よゝとゞろふ扇ぞうゝの雲おろと見えしゞ。刹那ふ一天
かきくもゝあたらも墨を潑らぶとく。一陣の暴風吹たゝ。
波濤山のごとくおこゝ。剩へ神鳴とゞめさて。もの凄じ
き光景ふゝ。時ばらゝあゝて雨歇風絶て。海のかぎゝ
うちふぶきて。遠水長天と一色の淺きどゝふえきゝ
たゝ。やゞて一輪の寒鏡雲のたえ間よゝ轉び出。所ハ
名たゞる須磨明石。對面のかとゝ淡路島。蛇のごとく
ふ匍匐。阿波の眉山。黛のごとくさやうをゝ。ゆの時阿
蘇次郎い。舷ふよゝ眺やゝけるゞ。猛然と想出しける。

往年宇治の螢狩よく。はうらゞも絶世の美人に奇遇
しゞ。そのとゝしも。かどうゝさやけき。月の夜ふゝ
所ハかきもど今月今日。そのぬしいいふれゝけうぞ青
春ハ破瓜頃ふゝ。今比ハ歯を染。袖をためて。誰ゞ金
屋の花とこのふゝけん。その後手ふ入し一首の戀歌ハ彼
かきての末のうき身をいふせん。たもうけ隅宇治の川
霧。」中たゞゞの霧たち人。その名深雪と書たると。懷
紙に巻そへて。来せしい。ときふ眞情あゝやをしたゞ。ふづ
かしの都鳥。さと問よしも波めうへよ。さしうつむけい。襟
もとふ。冷〻とたちさる笘の滴に。たもいず仰く後背ハ千
石舶の水押の下。原来前の白雨ふ。かの舶に繫合あゝしゝ

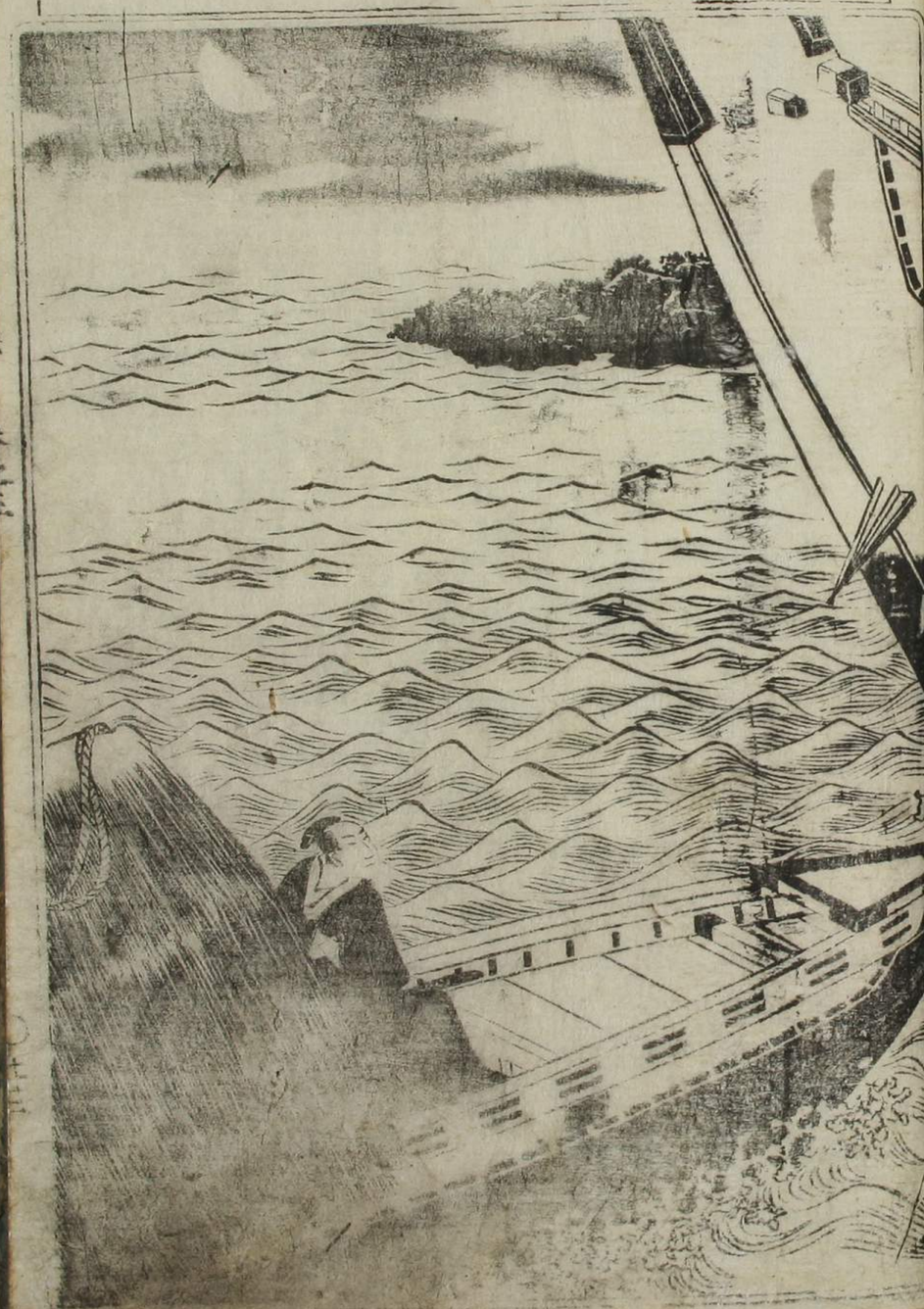
と獨おちたゞふぐめやる。海面はまを〳〵和。恰も盟の水のごとく。松ふく風も音絶けて。おいらぶらし。ぬしい誰ともまらぬひの。心ぢくしの箏音は。たしろふ隣の舶なり と。聞耳たつる那方い。轉軸撥爪と三両声ていまゞ曲とバねさざまど。まづ情ある涂よて。まおとふ大絃は嘈々とまて。急雨のごとく。小絃は切々として。私語のごとといへるもひあて。春雄はまバし聞入て。たばえずを大涙小涙ふふとち。身よしら骨よ浹て。腸はたつばらをねてをしゞ。曲罷のちまと音かし。只風清く月白れのを。春雄れのふやう。さてもあやしたまとうね。今の頌歌はて。むうし。三線の糸よまらべし朝顔の曲なて。さるという

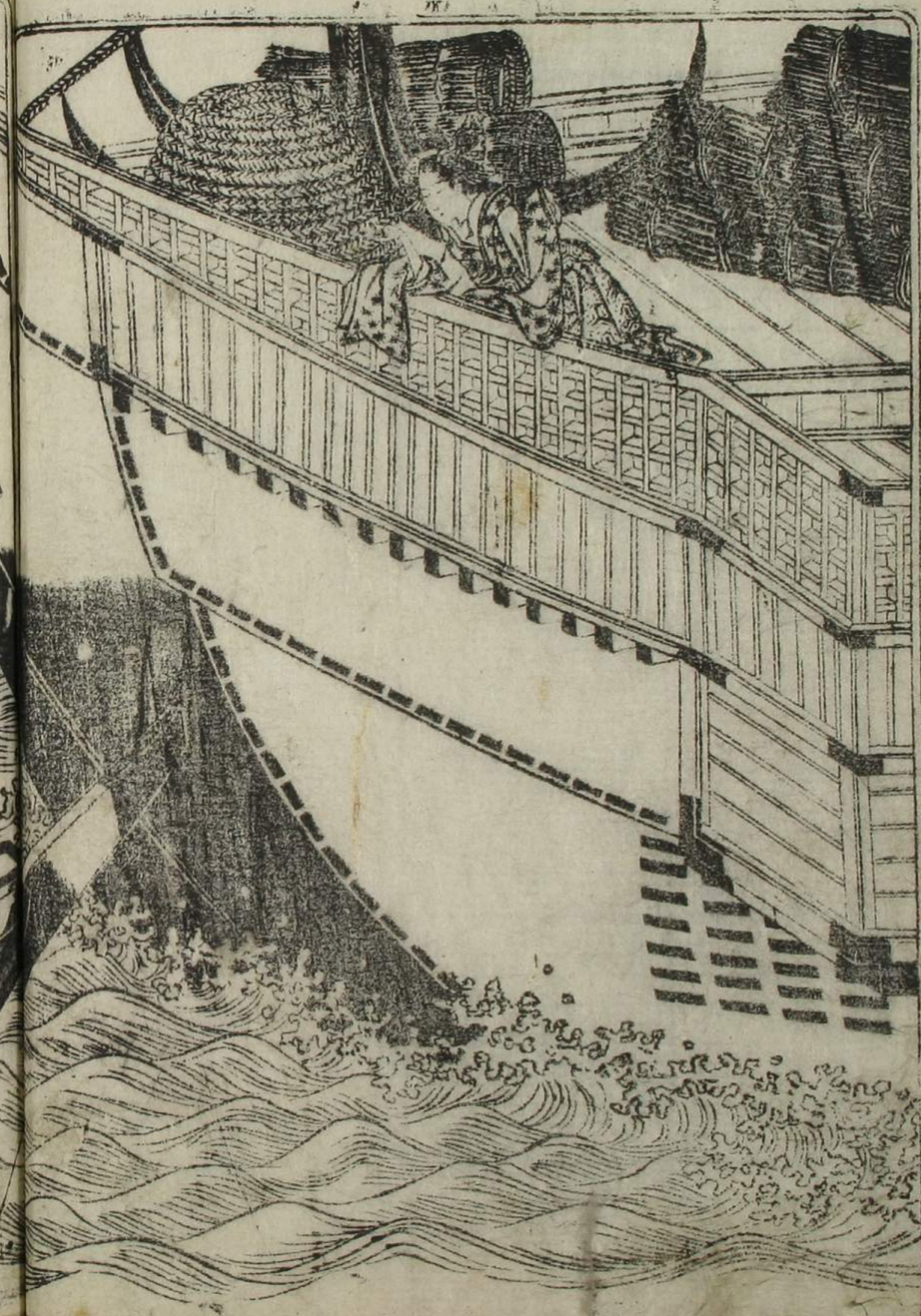
れる人のいうふをべ。かくるる船路よ彈ぜしぞと。そぐろうたゞ〳〵真夜半よ。れもひかそて居たをけて。まの人是別人よあらず　秋月弓之助が女児深雪よぞあをける。いうふをバ。今まの舶よあて。琴は彈ぜしぞといふこをよをさを引之助が故主筑前の國守太宰の少貳殿。一個の淫婦。お蘭といふものは愛せらを。そをが兄健卒傳藏をとをたて。國政は任せらをしうべ。傳藏もこ無頼の匹夫かるゆべ。君の虎威と借をて。古黎の人々は民よし。不時の課設とかけて黎民を苦しむ。ふをふよをて御領内の百姓ども。一揆は企て。那方這方蜂のごとくふ起り。袖が浦の御城下よ迫めうけ。和蘭傳藏を賜いるべ〳〵と

書訴ふを、御母堂紫光院殿の御心にさて秋月弓之助を召田さを、その大乱を静ひべーとの上意かを、弓之助初國へ出ー時ハ、再本國へハ四らゞとたもひしゞ、その弓之助いまゞ児姓だちの比御松囃の席よて祝言の謡ふうとひ損じ。已よ罪せらるべきかいまをーと、紫光禅尼その比ハ、御薫中よていと歎やうよ新羅の前とまうせーゞ殿へ御詫言仰せらを、さまゞーと御執成あるもへ。辛ておて危き所助うをぬ、その大恩須弥よを高蒼海よを深けをハ、その度ハ曲て、御母堂の御内意ふたがひ、忙りーく支度ふし、岡崎の寓居ハ、渾家水青よ托ーてを所完ハせ。あとよを下を来るべーと、手

苦所さざめ、おのをいまづ女児深雪所具ーををかれし都所たちいで、浪花の港口よを國守の御手船よ乗て下をけるゞ。をもも前の暴雨よ遇てこの明石の浦よ泊居たるかを、さてまを、弓之助う娘の深雪。ひとをび宇治の螢狩よて、宮城阿蘇次郎を眷戀ーゞ。たゞし都邊よ插ふゞら。ふをゞびあひ見よーもれく。そのうち さる奸人のためよさまをげらを。剰めくを所ーを。筑紫へくゞをもけば。何日まをとゞ情郎よあひてまを。おもひ忘をひまもれく。ひををらあくゞを佐。心地をへ例ふらず。ををの白雨の怖さよ。羅ひき被てふーあをる小。やをらうちをづまを。海面もれぎたをと舩子どもの

秋月こ之助
ゞ女児深雪
明石の浦ゑ
船泊―て
とらゞ情
郎阿獲次郎
ゑ環會





罵しる玆聞いともうげよ起出しが、艙口よこ入る、月光あらくまて、白日のごとく。夜もいさく更て人もふ眠をふしたるふぞ。あまたふたまま琴玆撥鳴しこが情郎の記念おる。朝顔の唄玆ちらべ行く。暮ひ屈したるとしごろの。おもふまろ玆ふくませて。そのあいをげよ彈じけるよ。阿蘓次郎おの曲と。くれハまて。且あやしく。且もうしくたべその人のかづらしく。僥倖と京へ官あげまのぼる、贅者と同船しもへ。そをが携る蛇皮絃を借こかを抱。一年深雪が母。氷青が宇治よて彈る。梅が香玆いくちう。妙よあやどをべ。おの撥音玆灰聞て。隣舶ふる深雪。陸裏よや徹けん。耳玆側て眉をひそめ。聞いをくネど。その人めをてれもぞえけまもとよまおの深雪ハ。蔡邕が子よあらねど。音玆知おと比れく。こが情郎の音深とハ朧氣ふらず猜せしよまやとら卧處とおのび出。蹋躇して櫓よあがまを。欄よ倚て見れろをよ恰好阿蘓次郎も。笘れしゑて窺へバ。いよくさやけを月明よ。偶とうち仰ぎて。見うハせる顔のまぐふうされき深雪ふるよ。深雪も春雄をそをと認むをべ。おいいふつうしといんとせし。後よまを。いつ間ら弓之助。女児が帶を捉てでを危ふしこひを入をべ。深雪ハやるせおく。こが在おとをおらせんと。記念の扇子玆とまもあへど。春雄をめがけて投まる。おの扇子あやまさず。阿蘓次郎が額をおをまとちて。その

まゝ膝の上よりでまてぬ阿蘇次郎いとしやおとしと拾
もあへどとしひらき。月よりとうせが、れば。えあろ朝顔の繪
賛ふて。さまがおそ猜せしおとく。さきつゝとの琴ぬしも。
深雪よてましけて。まをゝ深雪が真情をきて。身よ
きゝて感じけて。深雪ハたまさうてへうよ語もかいさず
親　よさうをし。うきなかさいち父が熟睡を待
かねてやうゝきのび出来まよ拉樓よてさし覗けば。
怖されそろしさもれもハず。度と落音よ。阿蘇次郎ハ
突一驚して見てあをが。深雪ハ三板よ隨たとを息
もたもるどうての光景よ。阿蘇次郎慌忙飛のて抱
りへ。還丹ふくませ。多方といさいをけをが。深雪ハ

やうゝよ人心地にくよて。阿蘇次郎ふきつと見て。
いとうをしけふうちまもて。知しらをへいざきらねど。
妾が名ハ深雪として筑紫の浪臣秋月弓之助が娘
ふてとべる。もゝ宇治の川舟よて。ふと眷戀たる
赤繩よて。その螢火ハ焦をねど。きうほくハ妾が
胸のうちよて。月見會もいさづらふ。いたつきたまふ難
面ハ。月よむら雲花よ風のさゝ媒人よあざむうを。種々
のさまたげよあひしよて。たゞ一をちの赤繩よた
しいふそて玉の緒も。ふどゝ絶んとせしやい
まど枕ハかてさねど。貞女両夫よまをえぬ操を。露
ばうをし憐とおぼし。鸞儔とれてたまひねと。

膝よいしとうちふして、咽びいまはくくときけるに阿蘓次郎も。深雪が心根とたもひやまへ道理よ。とをとてもいろふ出ぬる戀衣。そやかさねまくれもへども。娶よかふらど媒あまへ。互に武士の家にうまを。ふでう不正事ねをべきや。我望は遂しうへ。ふうろべた氷人をもちて、表むきよりまをいをん。無事ふたはしいて折は待をよ、そやく船に田らせたまへかさねこ環會てんを。ぶざめをうして別をんとを。深雪は恨の涙声よて、おくまでおもいきたひし身のたまくあひてきのまふうへをとおくをの曲もれし。何いまをきの身はいづくにもはをのれたまへ、もしをきのまく本國筑前小婦こ

おへ。邑虬之進とくしものよ合巻せよと。無体なる殿の仰のさふらくぞやたとひ命は失るよとも。異夫よ見え候まし。どまをかくまれいざくはやく。はをさせたまへとかきくどけい。阿蘓次郎はいまく便ふくれもへども。こを今姐くはをを退は。御両親の恨はらけ。世上の謗はいうよせん。さねらろ短くおばしを。病あをともいはをて。期とざにのばしたまくうちは。仕様摸様も待をねん。まづくく船よかをねと。さまくといいさとせば。深雪はつと起て。いうふどよ申ても諾るひたまはすばせひしねし。さらば。と一声身は躍らせ。ちいろの海へよ飛いらんすをは。阿蘓次郎阿呀て抱きとめ。さふどこまはをこことねらば。

いろふものぞふまうせぬん。ときを小節よりいって秋月殿の愛子をバ。見殺しせんも不仁ふて。合巵いともかくも。いろふ汚名な蒙るとも。かく實ある情人をいうて法きぬく見てつべきやいかふらずとやまったゝよ。ねと。制をる詞ゑ深雪いおちゐ居直ていいけるハ。をとよて縁をきてとる母ふきバ。かくるさいとふてたちのゑしと。あとふて聞たまハんふ。よろさいびたまハい治定なれど。とらい恵ねく。君ゑ從のくことな。たゞ一行書のこさん。硯ゐあらバかしたまへといふよ。阿蘓次郎腰をとゞて頭な搔南無三寶前をゐさあハて。墨手を海へとろしゐ。さハいゐぐせんと躊躇バ。深雪いさくよて。さもおらバ今一たび舶ようへて。書おき筑のおし。まさ些の細軟をも携てまいてねんと。頭揖よてよぢのぼる。阿蘓次郎ゑ腰な抱おさき。からうぢて裏ゑ入。とゞ卧處ふいさてていそかいしく。書置な志らめ。そのまゝ父ゞ枕もとゑさしをき。起んとせしゞまてきばし。もしやまてきまう。一生の別とゐらんもはゐてがさし。今いはゞ一目せめて父君の寢顔なおゞき。心ゞかての暇をせんものと。やとら躪よてて見てあきバ。ハかるし。ときハたゞ戀のミふ憂身なやつし。汝ねゝ不孝ゑ過せしゐえ。天の御罰や蒙てけん。父君ハ衾ひき被ててゐしたまへバ。御顔な拜むことゐかず。さハらバ御眼やさましたまハん。いゐぐ

せんとこゝまいつ。躊躇ふがらおづ〳〵と。蒲團をとこし
まくまこゝも。何よもさらず〳〵て。只をや〳〵と森入たる。
その顔をはを〳〵うちまもりて。あら勿体ふや。不義
いたづらといふよてもおけまど。おれ郎よそひとげん
と。おいとま申て出ものきさふら〳〵。不孝の罪ハ。ものさせ
たまへおとよてさそや歎きたまいん。おこゝをれ〳〵やと。
声をのこ。さすが別の悲〳〵さよ。おぼえずかる涙の雨。
父弓之助眼はさまし。娘が風狀心得ぞとそのまゝ
裳ういたらめば。おいかふしやと。娘い声をあげよくと泣
いさすよ。側おる書置を。弓之助とらんとす。深雪ハあい
てしろよて早く。窓よて海へふげ出せて。おのもの音に
侍女どもおい底事とさち騒げい。船頭おきよ眼覺
して。水子ども はは喚起し。やをを地嵐が出たハ汐も
よきぞ。そやく船出せと呼ぶ声。舟子ハおきよ激ま
さを。慌ふめき働ける。ヱイヤンザト連声して鐵描兒をおこし。
やをら布帆はは拽あぐをい。船ハたちまち矢を射る
ごとく。一瞬よ走て去。阿蘓次郎が乗たる小船と
せつふよ東西ふひきよとうを。まさぞ良縁を隔ける。

朝顔日記巻之三　終

# 書林

京都寺町通佛光寺　河内屋藤四郎
江戸日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛
同　貳丁目　山城屋佐兵衛
同　貳丁目　須原屋新兵衛
同本石町十軒店　英　大助
同淺草芽町貳丁目　須原屋伊八
同芝神明前　岡田屋嘉七
大阪心齋橋通博労町　河内屋茂兵衛
同心齋橋通本町角　河内屋藤兵衛